



Title	スーパーダイバーシティとは何か
Author(s)	坂本, 光代; 湯川, 笑子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2017, 13, p. 62-69
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69352">https://hdl.handle.net/11094/69352</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《対 談》

## スーパーダイバーシティとは何か

坂本 光代 (上智大学)

mitsuy-s@sophia.ac.jp

湯川 笑子 (立命館大学)

eyt24310@lt.ritsume.ac.jp

### Interview: What is Superdiversity?

Mitsuyo Sakamoto interviewed by Emiko Yukawa

#### 要 旨

スーパーダイバーシティ (超多様性) は社会人類学者 Steven Vertovec (2007) によって打ち出された比較的新しい概念で、人々の移動やテクノロジーによって促進される多様性の中の多様性を指す。この概念を社会言語学者 Jan Blommaert (2013) が、環境そして歴史的背景に即した言語使用の変容に結びつけて発展させた。彼によると社会的均衡 (共愉、conviviality) を保つために人々は言語を自分達のニーズに合う様に変化させ、その結果特殊なパターン (一様化、entropy) が浮上する。超多様性は従来の応用言語学のアプローチで解明するのは困難であることから、今までの実証主義的なアプローチではなく、ポストモダンの視座からの質的研究によって言及出来る、と考える。具体的には様々な環境や時代の事例を多く集め、発表することで継承語研究や教育に貢献出来ると考えている。

#### Abstract

Superdiversity is a relatively new concept first presented by a social anthropologist Steven Vertovec (2007). Superdiversity describes the diversity within a diversity which results from mobility and technology. This notion is furthered by sociolinguist Jan Blommaert (2013) to show how people adapt their linguistic repertoire and language use based on the ecology as well as history in which they are situated. In order to strike a social balance (conviviality) people devise language systems that best address their needs and concerns, giving rise to a particular sociolinguistic pattern (entropy). According to Blommaert (2013), superdiversity is characterized by mobility, unpredictability,

and complexity. Given its nature, it is argued that traditional, prescriptive applied linguistics is insufficient to capture and address the complex nature of today's language learning and use. Specifically, instead of offering prescriptive instructions in nurturing bilingualism and heritage language maintenance, it is suggested that we turn to a more qualitative approach where scholars collect narratives of bilingual experiences from a wide range of individuals from different parts of the world. This way we can preserve postmodern approach in applied linguistics, yet offer concrete models by which the public can eclectically choose elements that would be relevant for them in actualizing heritage language maintenance.

キーワード：超多様性、移動、複雑化、ポストモダン

【湯川】坂本先生、今年の夏には講演をしていただきまして、ありがとうございました。今回は、その中でも今年のMHB年次大会のテーマでありました「スーパーダイバーシティ」という概念について、あらためて教えていただきたいと思い、この対談をお願いしました。

【坂本】はい、よろしくお願いいたします。

スーパーダイバーシティとは

【湯川】まず、はじめに、スーパーダイバーシティという言葉がどういう意味なのか、誰によって使われ始めたのか、というあたりからお願いします。

【坂本】はい。私がはじめてスーパーダイバーシティというものに触れたのは、Blommaert (2013) の文献を読んだ時です。その後色々と読んでみたのですが、他の学者によると、一番はじめにこのスーパーダイバーシティが使われ始めたのは Steven Verrotovec (2007) と記されています。この方は言語学者ではなく、社会人類学者でして、特に人々の移動を研究されている方ようです。ですから、もともとは、スーパーダイバーシティ、多様性の中の多様性、超多様性というものは、人々が戦後に自分の国からよその国に移動しはじめ、それがきっかけになってどんどん多様性が増していった。さらに、近年になって今度はインターネットとか電話とか、テクノロジーに関連したものでさらにダイバーシティ、多様性が増していった。その複雑さを表すための用語として、スーパーダイバーシティが使われはじめたようです。

【湯川】 そうしますと、その多様性の中の多様性というのは、例えばひとつの地域に10カ国、10の民族が住んでいたなら多様だけれど、それがこう20になったとかそういう単純なものではなくって、もっと質の異なる多様性ということでしょうか。

【坂本】 そうですね。同じ移住者でも、新移住者と、だいぶ前に移住された方々だと、同じ民族であっても、移住先の国による移民の受け入れられ方とか、存在がかなり違うと記されているんですね。例えば、Blommaert (2013) の文献では、彼はベルギー在住なので、そこに住む様々な民族の人たちのことを記しているんですが、ベルギーにはトルコからの移民がすごく多いそうなんですね。でも例えば、一世のトルコ移民と、もう何代にも渡って既にベルギーに在住しているトルコ移民とでは、社会的地位も違うし、その人たちが使う言葉も違うし、同じトルコ人であっても、様々な人たちがいるという風に記しています。

【湯川】 なるほど。昔ならこの地域の人たちとか、この民族の人たち、この人種というふうにひとくくりをしていたらよかったものを、もっと中に入っていないと分からないということですね。

【坂本】 そうです。

### インターネットと超多様性

【湯川】 先ほどインターネットのお話ができましたけども、インターネットの存在は多様性の中の多様性に拍車をかけているということですか？

【坂本】 はい。もっと複雑化させているということで、拍車をかけていると言えます。インターネットによって人と人とのコミュニケーションが簡単になり、それだけお互いに簡単に影響を及ぼすのができる時代になりましたよね。そうすると、多様性の方は、複雑化されていくというのが、スーパーダイバーシティの概念だと思います。

### スーパーダイバーシティを構成する3つの概念

【坂本】 Blommaert (2013) はスーパーダイバーシティというときに3つの概念が伴うと言っています。まず Mobility、移動、そして Unpredictability、予測の難しさ、そして3つ目が Complexity、複雑さ、というふうに言っています。

【湯川】 なるほど。

【坂本】ですから、人が移動するようになって、いろんな人と交流をもつことによって、言葉ないし慣習、色々なものが非常に複雑化・多様化しており、しかもその方向性が、たぶんこうなるでしょう、という風に簡単に予測できるものではない。なぜなら、あまりにも要因が沢山ありすぎて、しかも複雑に交わっているので、どちらの方向にいくか、ということが、なかなか予測がつかないと言っています。それが逆にものすごくおもしろい概念だな、と私は思ったんですね。従来の言語学・応用言語学だと、こういう風に教えればこうなりますよ、という風にだいたい結果を予測して教育に携わってきた側面があります。けれども、実は人間というものはものすごく複雑で、学び方・在り方も複雑で、その複雑さを捉えるには、やはり従来のような物の考え方だと追いつかないんだな、とを感じるようになりました (Atkinson, 2011)。

【湯川】だからむしろ、その複雑な状態が、一時期で切り取った時の状況の中に特色を特定するというよりは、常にかたちを変えて続くということ自体が特徴である、というような捉え方をして、そうすれば、安易な予測を求めようとしないで済むというような、そういう風ふうに理解すればよいということですね。

## 歴史と超多様性

【坂本】そうですね。あともうひとつスーパーダイバーシティを理解する上で重要なキーワードに、「歴史」があります。要するに、多様性を考察する際、過去の歴史がこういう風に進んできたから今こうあって、というような側面がものすごく強い。だとすれば、過去に移民の人たちがどのように子どもの言語の教育に携わってきたのか、どのように母語を継承させてきたのか、なぜさせてきたのか、どのような環境でさせてきたのか、ということ把握しておくのはとても大事なことだと思うんです。だからこそ現代の継承の在り方があるわけで、そしてその在り方というのもこれまた複雑でいろんなかたちがあると思うんですね。民族によっても、その社会的背景によっても、色々違うと思うんです。例えば、ブラジル人移民と一言で言っても、実は様々なバックグラウンドの人たちがいて、色々な課題をお持ちで、やはり時代背景・社会背景が、複雑に交わって、その結果その人の在り方が変わってくる (e.g., 坂本, 2016; 坂本&松原モラレス, 2014; Sakamoto & Matsubara Morales, 2016) というものの見方です。

【湯川】なるほど、よく分かりました。もともと Vertovec という方、人類学者からは

まって、言語を研究する社会言語学者なんかに広がっていったというお話だったんですけども、これはどうしてそう多くの人に新しいパラダイムとして受け入れられたのかということを、先ほどと重複するかもしれないんですが教えてください。

#### スーパーダイバーシティとパラダイムシフト

【坂本】やはり従来の言語学・応用言語学のアプローチだけでは、本当に色々なことを解明できないし、現状を完璧に把握し、反映させることができないんだな、という風に研究者たちが気付き始めていると思うんですね。この Vertovec のスーパーダイバーシティという概念が、最初論文で記述されたのが2007年です。その頃、Diane Larsen-Freeman という著名な応用言語学者が Lynne Cameron と *Complex System and Applied Linguistics* (2008) という本をオックスフォード大学出版から出したのですが、これはまさしく言語習得というものが複雑であるということについて言及しています。人々の学ぶという姿勢、学ぶという作業というものが、私たちが想像する以上にずっと複雑で、また本人たちも独自の知恵っていうんですかね、その知恵を絞って学ぶ環境・条件を変容させているので、従来から我々が持っている、ある意味単純で、悪く言えばナイーヴな物の見方では、本当に現状を把握することは出来ない、と言っています。その自分の置かれた環境に一番即した行動・言動によって、自分たちが目標としているものに近づくために、学びの形が色々変貌を遂げているんですよ。それはその人たちが独自に編み出した手法であって、それを捉えるっていうことですかね。これが Complex System ですが、同時にほかにも Leo Van Lier など Ecolinguistics という、言語がその環境によってかたちづけられていくという風な、そういう概念も打ち出しています。やはりそのように、人々の独自の進み方を捉えるっていうのは、学者にとって大事なことなんだな、という風に改めて思いました。

【湯川】なるほど。もともとは長い間、認知的、Psycholinguistics 的なアプローチで Applied Linguistics が進んできた背景があり、昨今社会的な要因とか学び手の側からの働きかけや「投資」などといった側面が見直され、注意を向けるというようなことが行われてきましたから、土壌があったということでしょうか。

## 社会文化理論とスーパーダイバーシティ

【坂本】そうですね。あと、社会言語学と認知言語学って今までずっと別々のものとして捉えられてきましたけれども、私は社会文化理論（Lantolf & Thorne, 2006）に 興味を持っていて、社会文化理論だと、認知言語学と社会言語学を、一緒に持ってきて考えるというようなアプローチなんですね。

【湯川】なるほど。

【坂本】ヴィゴツキーの社会文化理論ですけれども、これは、社会的に起こったことが認知的な方に結びついて、それがその人の知識として蓄えられていくという概念ですが、ですから社会と認知が結びついていると考える方が私はずっと自然だな、という風に考えてきました。

【湯川】こうなりますと、当然我々の今年の MHB の年次大会の柱であった継承語教育にも自然に結びついてくるのだらうなという風に思うのですが、もう一度先生のお言葉で、このスーパーダイバーシティという概念と継承語教育との接点についてまとめていただけますでしょうか。

## 継承語教育への示唆

【坂本】やはりその、自分の置かれた環境によって対処法が変わっていく、継承語・母語を継承していくという活動が変わっていくと思うんですね。その中で保護者の方とかが独自に色々考えて、自分の置かれた環境でどうすればベストに母語を継承できるかという風に様々なことを試してやっておられると思うんですね。

【湯川】はい。

【坂本】ですので、私は長年、特に、母語、日本語を継承するにあたって、決して恵まれた環境に置かれていなくとも母語を継承してきた人たちの声を集めるという、そういう活動を行ってきました。日本語は、ある方たちの居住地域ではあまり価値あるものとして見なされない、資本があるものとして見なされていないのに、どうしてあんなに日本語教育・日本語保持に励めるのかな、というのがまず出発点だったんですね。やはり一昔前の継承語の在り方と、現代の、それこそ Vertovec（2007）の言うインターネットとかが発達した現代では継承の在り方も違いますし、またどの国に、またどの地域に居住しているのかによっても、状況は全く変わってきますので、一概にこういう風にやったらいいですよ、という風に簡単に言えない。でも、その時間・空間・場所に置か

れている自分が何をしたら最大限継承語が保持されるのかっていうのを、皆さん、応用言語学者でない方でも、普通の一般保護者の方もですね、色々アンテナを張り巡らして、独自の方法で実践されてるんですね。で、それをやはり学者が話を聞いてどういうことをやっているのか、この地域、こういう環境だとかいうことをやっているんだ、というのを、できるだけ沢山の事例を集めて(e.g., 坂本, 2016)、世に論文ないし講演、色々な発表の形がありますけれども、情報提供することが結局はその多様性を捉えるというのにあたって一番貢献できることなのかな、という風に私は考えています。

【湯川】なるほど。ですから我々はつい、一律に、どこに居る人、どの年齢層、親や子どもの状況に関わらずこれがベストのメソッドですよ、とかね、こういう風にされるといいですよ、というような一般的な汎用性の高い処方箋を求めてしまっただけで、それがたまたまうまくいくときがあっても、万能な処方箋はないのかもしれない、そんなに単純じゃない、ということですね。

【坂本】そうですね。ですから色々な話、色々な声を集めてそれを他の人にも聞いてもらって、あ、自分たちもこれならやれるかも、とか、これは当てはまるかも、でもこれは当てはまらない、という風に、あまりにも多様になりすぎているので、一概にこうすればいいですよ、という風には言えないんですけど、こういう事例がありましたと提示することによって、参考程度に聞いてもらえたらな、という風には考えています。

【湯川】はい。よく分かりました。では、最後に、スーパーダイバーシティを語る上で外せない概念があれば、それについてお聞かせ願えますでしょうか。

### Conviviality 「共愉」と Entoropy 「一様化」

【坂本】スーパーダイバーシティ、超多様性を語る上で欠かせないのは、Conviviality、「共愉」という風にわたしは呼んでいますけれども、「共生」とか「共愉」とかそういう感じですか、共に存在するという概念です。それぞれが自立しつつも同時に共生する、存在するというのがConvivialityの概念です。要するに色々な多様性が同時に発生して、同じ社会の中にうまく協調している感じの様ですかね。で、もうひとつがEntoropyなんですけれども、Entoropyを私は「一様化」と呼んでいます。

様々な多様性がもうそれぞれ100あったら100の多様性とする、確かにそういう側面もあるんですけども、そうするとあまりにもポストモダンの考



えで收拾がつかなくなってしまうですね。この事例もあの事例も全部が全部違いますと。でも多様性の中にもやはり共通項、共通しているパターンというものが出てくるんですね。それを「一様化」という風に呼んでいます。

例えば、日本以外で使われる特有の日本語とていうのが存在します。それはやはりカナダないしブラジルに住んでいて、ブラジルの言語や英語の側面をもった日本語というものを独自に開発して、それがみんなで共通に使われるようになったというような、言葉の発達のパターンというものがあります。だから皆、人間というのは受け身で、なにをする術もなくその社会にガチガチに立場を固定され活動を規制されている、というよりは、自分のユニークなアイデアを駆使し、その社会でやっていく上でベストな状態に自分たちで持っていっているんだと思います。それは、自分たちの自主性ででてくるものでもあれば外部との接点によってそういう風にかたちづけられているという側面もありますよね、ダイナミックな関係性が。

【湯川】 はい。よく分かりました。ありがとうございました。

#### 参考文献

- Atkinson, D. (Ed.). (2011). *Alternative Approaches to Second Language Acquisition*. New York, NY: Taylor & Francis.
- Blommaert, J. (2013). *Ethnography, Superdiversity and Linguistic Landscapes: Chronicles of Complexity*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Lantolf, J. P., & Thorne, S. L. (2006). *Sociocultural Theory and the Genesis of L2 Development*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Larsen-Freeman, D., & Cameron, L. (2008). *Complex Systems and Applied Linguistics*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Sakamoto, M. & Matsubara Morales, L. (2016). Ethnolinguistic vitality among Japanese-Brazilians: Challenges and possibilities. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 19, pp. 51-73.
- Vertovec, S. (2007). Super-diversity and its implications. *Ethnic and Racial Studies*, 30(6), 1024-1054.
- 坂本光代 (2016). 「日系ブラジル人コミュニティにおけるスーパーダイバーシティ：ニューカマー・オールドカマーの日本文化・日本語保持」 本田弘之・松田真希子編『複言語・複文化時代の日本語教育』(pp. 163-181). 東京：凡人社.
- 坂本光代&松原モラレス礼子 (2014). ブラジルでバイリンガルを育てる：日本人&日系人のケーススタディ. *Sophia Linguistica*, 62, pp. 45-67.